

新刊紹介

村岡健次著『ヴィクトリア時代の

政治と社会』

東田雅博

かつて吉岡昭彦氏は、近代イギリス史研究者を、「再検討論」派（『大塚史学』ないしマルクス主義批判）と被再検討派（吉岡氏）とに分けられたことがあるが（吉岡昭彦「イギリス近代史研究の方法的再検討」、柴田三千雄・松浦高嶺編『近代イギリス史の再検討』、一九七二年、所収）、ここでは本書の筆者は「再検討論」派に属すとされていた。本書は、新たな歴史認識の立場（『イギリス』という文法的個体の解明を目的とする）と方法論（公式的経済決定論の排斥）とをもって、まさしく近代イギリス、なかならず一九世紀イギリス史の再検討―新たな歴史像の構築を試みんとするものである。その試みは、具体的には一九世紀を通じて地主階級がイギリスの政治的支配階級であり続けたという事実、更に、このことと深くかわる次のような事実、すなわち、産業革命以後もイギリス社会は、階級社会の成立にもかかわらずなおジェントルマン―ノン・ジェントルマンの階層制社会であり続けたという事実、これら諸事実の史的意義を問うことで果される。紹介者には、この試みは相当程度成

功しているように思われた。とまれ、以下順次各部各章の内容を簡単に紹介することにするが、まず本書の構成を次に示す。

総説 ヴィクトリア時代の歴史像

第一部 ヴィクトリア時代の政治

第一章 自由主義時代の再検討

第二章 保守主義の成立と展開

第三章 二大政党制の形成過程

第二部 ヴィクトリア社会の位相

第一章 ジェントルマン理念の変容

第二章 生活史から見た上流と中流

第三章 サミュエル・スマイルズの思想と労働貴族層

第三部 プロフェッションナリズムの成立

第一章 技術者の社会的地位

第二章 医師法（一八五八年）に見る自由放任と国家干渉

総説は一九世紀イギリス史の全体像についての筆者のスケッチである。筆者によれば、一九世紀イギリス史は一八七〇年代で二分されると言う。七〇年代に至るまでの通説の歴史像は、工業化の進展を背景に登場したブルジョア階級の政治的・経済的支配の確立過程を描くものであった。しかし、筆者は、ヴィクトリア中期（一八五〇―七〇年）においてさえ全イギリスの政治機構は地主階級により掌握されていたのであり、この事実を重視するならば、七〇年代までイギリスは地主階級による貴族政の国家であったと見るべきだと言っているのである。このことは、伝統的体制の自己保存能力が地主支配

体制の安定要因として有効に働き、ブルジョア階級、労働者階級を次々に伝統的体制内に包摂してしまった結果であった。では七〇年代以後はどうか。通説においてはなお明確な歴史像が構築されていないのだが、筆者によれば、七〇年代から一九〇〇年に至る時代の政治は、地主階級を含む資産階級の手中にあり、この意味で当該期はなお貴族政の時代であると言う。その基盤は資本輸出とイギリス帝国の存在にあった。P・アンダーソン流に言えば、帝国主義が貴族政を救ったというわけである。(P・アンダーソン「現代イギリス危機の諸起源」、佐藤昇訳『ニュー・レフトの思想』一九六八年、所収)。

第一部。紹介の都合上、第二章より始める。イギリス保守主義は一八世紀末にフランス革命の衝撃を受け誕生した。フランス革命に対する反革命思想たるバークの『フランス革命の省察』が、すなわちその具体的表明である。かくて、バークこそがイギリス保守主義の生みの親となるが、彼の思想はなるほどフランス革命(人間理性による「伝統的なるもの」への批判)に対する徹底的な反革命思想(「伝統的なるもの」擁護)ではあったが、決して反動的なものではなかった。というのは、第一に、彼の「伝統的なるもの」には、民主制発展の基調となりえたイギリスの旧制度であったし、第二に、彼は保守のための改革の必要性を認識していたからである。第二の点を別言すれば、バークは伝統的諸価値を現実世界での効用という観点から評価する態度を持っていたということであり、まさしく、この点こそが保守を反動から区別する指標なのである。さ

る。

第三章では、そこでの政党をなお現代的政党概念では把握しえない時代の二大政党制の形成過程が明らかにされている。

さて、先に紹介したブルジョア階級の政治運動が権力闘争に転化しえないという状況は、当該期の文化「教養のあり方を明らかにすること」で一層説得的に理解される。この文化「教養の問題こそ第二部の中心の課題である。第一章。筆者によれば、イギリス社会は、産業革命以後もなおジェントルマンとノン・ジェントルマンとの階層社会であったと言う。勿論、筆者は、産業革命以後イギリス社会が階級社会となったことを認めないわけではない。しかし、通説(H・パーキンなど)のように、従ってもはや階層制社会ではないとは考えないのである。いわゆる(商工業ブルジョア階級の所領購入による)ジェントリ化現象は一六世紀以来、イギリス近代史に普遍的なものであるが、筆者によれば、中流階級は産業革命以後もジェントルマンの地位に魅惑され続け、一八五〇年頃には、「消費革命」を背景に遂にジェントルマン化意識は中流階級のエリートと化すに至ったのである。では、そのジェントルマンとは何か。階層としては、貴族・ジェントリにプロフェッションの一部(国教会聖職者、法廷弁護士、内科医など)を含むものとされる。そのメルクマールとしては、第一に、T・ウェブレンの定義による有閑階級であること、第二に、ジェントルマンの教養(人文主義、ギリシア主義——パブリック・スクール、オックスブリッジのエリート教育が大きな意義を有した)を身に着けていること、が挙げられる。先に寸言し

て、かくてバークにおいてイギリス保守主義が成立したのであるが、それはバーク以後どう展開していったのか。一九世紀地主階級は、バークとは異なり、新興ブルジョア階級をそのトレーガーとする資本主義の発展を真の歴史形成力であると認めざるを得なかった。かくて、一九世紀イギリス保守主義は、政治的支配階級である地主階級の資本主義社会への適応(「伝統的体制内にブルジョア階級、労働者階級を包摂すること」)を課題とするようになったのである。そして、一九世紀前半においては、ピールが穀物法撤廃の断行などによりブルジョア階級を体制内に馴致することで、後半においてはデイズレリーが彼の保守主義の本質たるイギリス国民の保守性に対する信仰に基づき第二次選挙法改正を断行し、労働者階級を体制内化させることで、それぞれの与えられた課題を遂行したのである。

第一章は、一八二〇年代のリベラル・トーリーの自由貿易政策、三二年の第一次選挙法改正、四六年の穀物法撤廃、を例にかかるとイギリス保守主義の展開を具体的に明らかにしたものである。従って、ここでは、これらの諸事件は産業革命を背景に興隆したブルジョア階級と支配階級たる地主階級との闘争史の文脈(この勝利者はブルジョア階級である)で理解されるのではなく、むしろ、これらの諸事件を通して、ブルジョア階級の政治運動が当該期の社会的価値体系「地主的価値体系」という厚い壁に阻まれどうしても権力闘争に転化しえないという状況の中で、いかに巧妙に地主階級がブルジョア階級を自己の体制内に包摂してしまっただかが語られるのであ

たように、中流階級がこのようなジェントルマンになる伝統的方法は所領購入であった。ところが、この所領購入の動向に一八五〇年頃に一大変化が生じた。地価の大幅な高騰である。その結果、一八五〇—七〇年代には、所領購入によるジェントリ化というジェントルマンへの道が閉塞状態に陥ってしまったのである。しかし、このことは、ジェントルマン「ノン・ジェントルマン」の伝統的階層秩序を揺がしはしなかった。逆に、この時期にかかる階層秩序が強化されたのである。それをもたらしたのもこそ、ジェントルマンへのもう一つの道、つまりジェントルマン教育制度の機能であった。要するに、一八五〇—七〇年代には、所領購入によるカントリ・ジェントルマンではなく、エリート教育でジェントルマンの教養を身に着けたプロフェッションのジェントルマンが中流階級のジェントルマン化の主要コースとなるに至ったのである。この事態こそがジェントルマン理念の変容の内実には他ならない。そして、当該期における教育改革、官僚改革は、かかる文脈の中で理解されねばならないのである。

第二章では、上流階級(「貴族・ジェントリ」と中流階級(「上流階級よりは下で、労働者階級よりは上の諸階級」)の具体的生活が述べられている。とりわけ、ピール家を例にとった、成功した産業資本家のジェントルマン化の歴史は興味深い。

第三章は、我国でも中村正直訳『西国立志編』の原著者として知られているS・スマイルズ(一八一二—一九〇四)の思想を、本書を貫通する産業革命以後のジェントルマン化意識の機能という視

角から分析したものである。彼の思想は、一応一八五〇—一七〇年代に至るイギリス資本主義の絶頂期における「イギリス資本主義の精神」の表明であると規定できる。ところが、彼の思想は、単に「勤労の教説」のみではなく、人格形成をその窮極の目的として説くものだったのであり、この点でウェーバーの「資本主義の精神」とは同一視しえないのである。そして、その人格形成とは、まさにジェントルマンに至る人格の形成であった。但し、スマイルズの説くジェントルマンは第一章で述べた正統ジェントルマンではなく、「真のジェントルマン」(中流階級以下、生産者階級、ヘブライ主義)であった。では、誰が「真のジェントルマン」たらんとするのか。それこそ、ウィクトリア中期の「豊かな社会」に誕生した労働貴族層であった。つまり、当該期における労働者階級の体制内化の潮流の中で、スマイルズの思想は労働貴族層の社会移動階級を越えた地位の上昇の願望に適的なものだったのである。この意味で、スマイルズの思想は、ウィクトリア中・後期の自由労働主義を顕現した、と筆者は言うのである。以上のように、本章は、第一章に直接かかわるもう一つのジェントルマン論だとも言えよう。

第三部。第二部も多分にそう言えるのだが、この第三部は文字通り先駆的業績である。第一章では、「イギリス病」の原因を社会的に解明せんとするの展望の下に、土木技術者のプロフェッション化の過程とその結末が、ここでもジェントルマンの階層制の視角から明らかにされている。先進資本主義国たるイギリスにおいては、プロフェッション資格が国家の権威に依らずに当該職業集団の法人化、

自由放任の原理が貫かれたからである。さて、医師のプロフェッション化の過程は中世末期の医学状況に遡らねばならない。一六世紀前半に医学三階層(physician, surgeon, apothecary)の分業が体制化されたが、一七—一八世紀にはかかる体制が崩壊する。この崩壊は、ギルドと絶対主義医学法制的規制力の衰退を意味し、一八世紀末には医師資格のアノミーが到来した。そして、このアノミーの中で跋扈した不正規医に悩まされた一般開業医がかかるアノミーを解消すべく資格確立運動(医事改革を引き起し、表題の一八五八年医師法を成立せしめたのである。かくて、本法により医師資格アノミーに終止符を打ったわけであるが、問題は、かかる明白な国家干渉政策が自由放任の風潮により規定されていた点である。本法は、公的領域での医療行為を登録された正規医に特権的に保証する一方で、プライベートな領域で不正規医の医療行為を認めていたのである。この意味で、本法はまさしく自由放任と国家干渉との「ヴィクトリア的妥協」の産物であった、と筆者は言うのである。

以上、粗略ながら本書の内容を紹介してきたが、最後に紹介者の感じた素朴な疑問を述べておきたい。第一に、たしかに筆者は冒頭に紹介した歴史認識の立場と方法をもって、従来の研究では擲いえなかった諸問題を明らかにしている。しかし、筆者の構築した歴史像だけで一九世紀イギリス史の全体像を構成しうるものであろうか。そこに、従来の研究が描いてきた歴史像をどう重ね合わせるかという問題が生じないであろうか。第二に、筆者は、地位、位階制のウィクトリア人への影響を階級による規定よりも重要であったと

更にプロフェッションの資格付与団体化を通じて確立された。しかし、この過程は、同時に、当該職業集団の地位向上運動(「グルーブの社会移動」の過程でもあった。さて、土木技術者は、一九世紀後半には資格付与団体の地位を確立し、技術者全体の中ではその教養の故に貴族的地位を保った。ところが、プロフェッション、更には社会全体の中ではジェントルマンならざる下級プロフェッションに留まったのである。それは、一つには、一九世紀末葉にはなお伝統的なジェントルマンの理念が社会の価値体系として厳然として存在し、労働を本質として含む理念を排しており、第二に、彼ら自身が理論的知識(科学に基づく教養)よりも実際の知識を重視していたからであった。

第二章は、自由放任と国家干渉という一九世紀イギリス史の大問題に、医師のプロフェッション化の過程を明らかにすることにより新たな光を投げかけんとするユニークな論稿である。この問題に関して「一九世紀行政革命」論争が行き着いた結論は、「一九世紀において「自由放任と国家干渉が同時並行的かつ拡張的に進行した」(岡田与好)というものであった。しかし、筆者はこの結論に満足しない。国家干渉と自由放任は切り離してはならず、国家干渉政策を特殊イギリス的に規定した要因として自由放任を強調すべきなのである。そして、医師のプロフェッション化の過程を明らかにすることによりこのことを論証しうるのである。というのは、第一章でも見たように、イギリスの場合、プロフェッション資格の付与と管理はそれぞれ資格付与団体の自由裁量に委ねられ、この点において

考えておられるが、一体、その根拠はどこにあり、それはどう論証されるのであろうか。同時代人が強いジェントルマン化意識を持っていたというだけではその論証にはならないのではなからうか。かかる疑問を感じはしたが、冒頭で述べたように、本書は新しい歴史像を説得的に提示しえており、従来の歴史叙述にあきたらぬい、政治史、社会史、文化史に関心を寄せる広範な人々を満足させるであろう。是非一読をお勧めする次第である。

(一九八〇年四月刊、ミネルヴァ書房、三一四頁、三八〇〇円)

一九八一年度広島史学研究会役員(補遺)

委員

- 市田 弘昭(日)・岩崎 好成(西)・小尾 孟夫(東)
- 岸田 裕之(日)・曾我 良成(日)・田中 仁(東)
- 谷山 正道(日)・寺尾 健夫(社)・中山 富広(日)
- 長沢 洋(日)・野島 一郎(西)・藤野 次史(考)
- 宮地 啓介(西)・村田 栄治(地)・渡辺 愛子(西)